

# 上野殿御返事

弘安三年九月六日 五九歳

南条七郎五郎殿の御死去の御事、人は生まれて死するならいと、智者も愚者も上下一同に知りて候へば、始めてなげくべしをどろくべしとわをぼへぬよし、我も存じ人にもをしへ候へども、時にあたりてゆめかまぼろしか、いまだわきまへがたく候。まして母のいかんがなげかれ候らむ。父母にも兄弟にもをくれはてゝ、いとをしきをとこにすぎわかれたりしかども、子どもあまたをはしませば、心なくさみてこそをはし候らむ。いとをしきてこゝ、しかもをのこゝ、みめかたちも人にすぐれ、心もかいがいしくみへしかば、よその人々もすゞしくこそみ候ひしに、あやなくつぼめる花の風にしばみ、満月のにわか俄にう失せたるがごとくこそをぼすらめ。まことゝもをぼへ候はねば、かきつくるそらもをぼへ候はず。又々申すべし。恐々謹言。

九月六日

日 蓮花押

上野殿御返事

追申。此の六月十五日に見奉り候ひしに、あはれ肝ある者かな、男なり男なりと見候ひしに、又見候はざらん事こそかなしくは候へ。さは候へども釈迦仏・法華經に身を入れて候ひしかば臨終目出たく候ひけり。心は父君と一所に靈山浄土に参りて、手を取り頭を合はせてこそ悦ばれ候らめ。あはれなり、あはれなり。